

プロジェクト型授業での複言語・複文化教育の試み

—ドイツクリスマスマーケット in 都筑 2023 への参加を通して—

松木 瑤子(桐蔭横浜大学)

1. はじめに

桐蔭横浜大学では、共通教育プログラム「MAST」(以下、「MAST」)¹の一環としてプロジェクト型科目を設置し、協働力や問題解決力を育成することを目指している。とりわけ、初年次学生向けの「プロジェクト入門」では、学生が身の回りの出来事や社会問題を解決するために必要な知識とスキルを養うことを目的として、自分たちで企画を立てて運営したり、企業や組織が抱える問題をリサーチして自分たちなりに解決策を提案したりするなど、目標設定や計画の立案、実行、そして検証までのプロジェクトの一連の作法を経験的に学ぶことを目指した授業設計になっている。²

今回は、初年次学生向けのプロジェクト科目のうち、後期に開講された「プロジェクト入門(異文化スタディ)」での実践について報告する。この科目は、「地域創生」「ビジネス・インテンシブ」「異文化スタディ」「現代心理」「地球環境」の5つの科目群からなる MAST のうち、「異文化スタディ」科目群に配される唯一の初年次学生向けのプロジェクト科目であり、本学のユニバーシティ・ポリシーのうちの「複眼的思考力」「リーダーシップ」「共感力」の3つの力を養うことを目指している。発表者は今年度よりこの科目を担当することとなった。プロジェクトの実施にあたり、地域連携・異文化交流・授業日程の3つの観点から外部イベントへの参加を検討し、横浜市都筑区で毎年12月上旬に開催されている「ドイツクリスマスマーケット in 都筑」にてブースを出店することが決まった。

2. ドイツクリスマスマーケット in 都筑 2023 への出店に向けて

本学では、通常授業が1コマ105分×13回となっていることから、全13回のうち、最初の5回をドイツの国の概要や宗教事情、本場ドイツのクリスマスマーケット、都筑区とドイツとのかかわりなどについて知識を深める期間に、次の4回をドイツクリスマスマーケット in 2023 への出店に向けた企画の立案と出店準備のための期間に、そして最後の4回を12月のドイツクリスマスマーケット in 都筑 2023 での企画の実践と検証をする期間にして授業を行うこととした。

履修者の多くは、この科目の履修動機として、前期に異文化スタディ科目群の科目³を履修し異文化理解や異文化交流に興味を持ったことを挙げていた。一方で、ドイツについて十分な知識を持っているわけではなかった。初回授業時のアンケートでは、ドイツについて知っていることとして「サッカー」や「ビール」「ウィナー」などの単語を挙げる程度であり、確認したところ、東西冷戦やベルリンの壁といった歴史的な事柄については「知らない」と答える学生が少なからずいた。また、ドイツの地理的な場所を把握していない学生も一定数いた。そこで、最初の5回の授業では、講義形式で知識を確認していくよりも、学生が体験的に知識を身につけていく方が効果的だと判断し、学生自身がリサーチをして知識を整理していく時間を多く設けることとした。また、ドイツのクリスマス文化についての知識を深めるだけでなく、他国のクリスマス事情にも目を向けて、世界各地のクリスマス文化を相対的に理解することができるよう、本学に併設されている桐蔭英語村からアメリカ、インド、フィリピン出身の英語のネイティブ講師3名を招聘して、それぞれの出身国・地域の宗教事情とクリスマスの習慣について英語で紹介してもらう機会を設けた。英語「で」学ぶという体験は、学生たちにとって、既存の知識を新たな学びに活かすことができるのだという気づきになったようだ。

6回目以降の授業では、ドイツクリスマスマーケット in 都筑 2023 への出店に向けて、ブースの企画と準備を行った。ブースについては、これまでの授業での学びを踏まえて各自が考案したのち、授業内でプレゼン大会を実施したところ、ドイツのクイズコーナーを出店することとなった。具体的には、来場者にドイツに関するクイズを出題し、ドイツへの理解を楽しみながら深めてもらうという内容である。正解者にはブース内に設置したクリスマスツリーにオーナメントを1つ飾ってもらい、開催2日間でツリーがどれほど装飾されるのかという副次的な企画も組み込んだ。また、正解・不正解にかかわらず、ドイツ語のメッセージが書かれた学生手製のオーナメント1つを参加賞としてプレゼントしたことで、子どもを中心に多くの来場者があった。クイズは履修者73名を13グループに分けて、グループごとにテーマを割り当てて1人1問ずつ考えてもらった。そうすることで、幅広いテーマで多くの問題を出題できるようにした。また、当日の運営もこのグループを基本として行った。発表では、企画の準備、実践、検証までの流れを中心に報告する。

3. 成果と今後の課題

発表者はフランス語教育を専門としていることから、ドイツに関する知識が決して十分とはいえなかった。そうしたこともあり、授業形式を知識伝授型の講義形式ではなく、学習者主体のアクティブラーニング形式にして「学生とともに学ぶ」ことを重視したことは、授業成果の一つと言えるだろう。学生からは、授業時に行ったクイズの作成が印象に残ったというコメントが多く寄せられた。また、クリスマスマーケット当日は、ドイツ文化にじかに触れるだけでなく、幅広い世代の人と交流することができ、それもまた、学生たちにとっては一つの異文化体験となったようだ。一方で、準備不足は否めず、限られた授業時間で出店内容を企画し準備を進めていくことが、次年度以降の課題である。

¹ 共通教育プログラム制度は2022年度に開始した。

² PR TIMES 「【桐蔭横浜大学】全学部と本年度開設の現代教養学環でプロジェクト型学習の新たな展開科目を導入」 <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000038.000049026.html>

³ 異文化スタディ科目群のコア科目である「異文化の科学」を指している。この科目では、異文化コミュニケーション学の見方を理解することを目的としている。